六、パネリストによる問題提起(3)

シンポジウム「どこへ行く民族と国家」

広瀬崇子

南アジアからの見方

お二人の大変興味深いお話、並びにお三方のそれぞれの視点からのコメントは私にとっても非常に勉強になりました。私は以前、民族問題について研究会に参加したことがございましたが、その時にも経済と民族問題の接点がなかなか見つからず、所詮両者は無縁のものだなどと乱暴な議論をした覚えがございます。本日伊豫谷先生のお話を伺って目の前の霧が晴れたような気がいたしました。また、私はインドやパキスタンを扱っております関係から、イスラームの問題には大変関心があったのであすが。ハンチントンではないですが、どうもイスラームというと異質なものといった先入観が強くて、イスラームと国家の関係を整理することができませんでした。常に国家の立場からイスラームを捉えようとしていたのが誤りだったのかも知れません。つまり国家が宗教をどのように利用するかという問題しか頭になかったわけです。逆にイスラームの考えで国家がどのように位置づけられるか、といった根本的な問題を全く考えていなかったわけです。小杉先生のお話は私にとってとてもいい勉強になりました。

【歴史的背景】

私はインド政治を専門としておりますので、今日はインドでは民族と国家がどのような問題を起こしているかについて私の見解を簡単に述べさせていただきたいと思います。インドは世界第二位の人口（約九億）を抱え、五〇〇〇年の歴史と文明を誇る国ですが、その歴史の中で次から次へと外部勢力の侵入を受けてきた結果、今日の複雑な民族構成が出来上りました。インド亜大陸にはもともと身長が低くて黒褐色の先住民が住んでいたと言われます。そこへ中背、黒色で鼻が低く、ドラヴィダ語を話すドラヴィダ人がアフガン方面から移住しました。先住民は山岳地帯に追われて、他の世界から隔絶された生活を送ってきました。今日「山岳部族」と呼ばれる人達がこれにあたります。ドラヴィダ人は古代インダス文明を築き、紀元前二五〇〇年から一五〇〇年頃に最盛期を迎えました。

続いて紀元前一五〇〇年頃からインド・ヨーロッパ語系のアーリヤ人の侵入が始まります。彼らはドラヴィダ人を南方に追いやって北・中央インドに定住しました。南インドがドラヴィダ系、北インドがアーリヤ系という分布はこの時に出来上がりました。今でも南インド、特にタミルにはドラヴィダ・ナショナリズムが反北インド・反ヒンディー感情という形で根強く残っています。ところで、このアーリヤ人の支配が確立するころにカースト制度が生まれたと言われます。少数の支配者が先住民族を隷属化し、独自の社会秩序を作り上げるために考え出したものです。

その後八世紀あたりからイスラム勢力の侵入が始まり、十六世紀にはムガル帝国を樹立します。ムガル皇帝は強力な軍隊と行政機構を使って統治を行い、また低カースト層を中心にヒンドゥー教徒のイスラムへの改宗も行いました。しかし大多数のヒンドゥー教徒は村に閉じこもって、カースト制度を基礎として自らの生活秩序を守り続けたわけです。

最後の仕上げは十七世紀に始まったイギリスの植民地統治です。イギリス統治は官僚制度、議会制民主主義など多くの近代的制度をインドにもたらしましたが、同時にヒンドゥー・ムスリムの対立も引き起こしました。イギリスの

「分割統治」が大きな原因の一つと言えます。ヒンドゥー・ムスリムの対立が深まり、結局一九四七年八月、英領インドはインドとパキスタンに分離独立することになりました。多くのムスリムは「ムスリム国家」パキスタンへ移住しましたが、それでも宗教の自由を認める「セキュラー国家」インドには多数のムスリムが残りました。五〇〇〇年の歴史と文明を分断された印パ両国は、新たにナショナル・アイデンティティを模索しなければならなくなったわけです。

【エスニック状況】

さて、このようにしてできた今日のインド社会は民族的には大きく三つの要素から構成されています。すなわち宗教、言語、カーストです。インドの宗教構成はヒンドゥーが八二・六%、ムスリムが一一・四%、キリスト教二・四%、シク教二・〇%、仏教〇・七%、その他となっています。ヒンドゥーが圧倒的多数ですが、インドは宗教、信仰の自由を認めるセキュラー国家です。またインドでは全国民が理解する言語は存在せず、ヒンドゥーと英語が全国レベルの公用語となっていますが、その他に憲法に一四の言語が明記されており、その多くが州の公用語になっています。カースト差別は憲法で禁止されていますが、それのみならず、いわゆる「不可触民」と呼ばれる最下層のカーストは憲法で「指定カースト」として様々な保護を受けています。

インドの特徴は、第一にこれら三つの要素が交錯しており、一人の人間が最低三つのアイデンティティをもっている点です。そのうちどれが重要になるかは時の政治状況によって左右されることになり、エスニック・グループの生成・発展・消滅も極めて流動的であります。第二の特徴はエスニック・バウンダリーが不明確である点です。インドにいくつのエスニック・グループが存在するかを特定することは不可能です。第三にインド社会は多数派ヒンドゥー

対少数派ムスリムといった単純な構図では割り切れない点があげられます。ヒンドゥー社会はさらに言語、カーストによって細分されているからです。第四にインドの諸民族の多くは国境を跨って隣国にも存在している点です。パンジャーブ人、ベンガル人、タミル人などがその代表的な例です。

【エスニック紛争】

このような複雑な社会を成すインドは独立以来多くの民族紛争を抱えてきました。九〇年代に入ってからもカシミール、パンジャーブ、アッサムなどのインドの周辺部分での地域紛争や、ヒンドゥー寺院再建問題にからむヒンドゥー・ムスリムの対立、それに低カースト優遇政策に対する上位カーストの反発など様々な問題が起きています。本日のテーマに直接関係しているのは前者ですので、ここでは地域紛争を扱ってみたいと思います。地域紛争は言語、宗教が混ざって複雑な構図になっていますが、元を正せばそれらは地方の中央に対する挑戦、すなわち地方自治権の拡大要求として始まっています。それが、中央政府が対応を誤ったためにエスカレートし、最終的には分離独立を求める運動に発展したりすることもありますが、紛争の犠牲者が多数出て（極端な場合、首相の暗殺もありました）、政府がそのコストの高さに気がつくと、当事者と交渉を持ち地方自治権を拡大して紛争を収拾していくといったパターンがみられます。

インドのエスニック紛争が複雑化する一つの原因は隣国の関与です。特にパキスタンがパンジャーブやカシミールの反政府分子を物心両面で支援していることは今日では常識になっています。（同様にパキスタンのシンド州の反政府運動をインドが支援しているとも言われていますが。）パンジャーブは分離独立の時に印パ両国で分割されました。カシミールは紛争が継続中ですが、実質的には両国で分割支配されています。少なくとも話し言葉を共有するこ

れらの地域で隣国に介入するのはいとも簡単なことです。両国政府も「外国の手」をことあるごとに指摘し、紛争当事者の正統性を否定しようとします。印パ関係が改善されない限り、両国が民族紛争の絶滅に成功することは決してないでしょう。

【民族と国家】

最後にインドにおける民族と国家のゆくえをまとめてみたいと思います。民族紛争は国民国家に対する挑戦ではありますが、インド亜大陸の歴史は分離独立が問題の解決にならないことを示しています。アスラーニ前駐日インド大使は「分離独立は何ら問題を解決しなかったばかりかさらに多くの問題を生み出した。仮にインドが五つの国家に分裂すれば、それまで一つであった軍隊が五つできることになり、しかもそれらが互いに対峙し合うことになる。分離独立の悲劇を知っている者であれば、新たな分離を口にすることがいかに軽率なことであるかよくわかる」と語りました。

国民国家の神話が崩れかけている今日ですが、インドの例から言えることは、国民国家が分裂しても実は国民国家の数が増えるだけで、国民国家の性質そのものは何ら変わらないということです。それは量的な変化であり質的な変化ではないのです。むしろ問題にすべきは国家主権の在り方であると私は考えます。インドで紛争が絶えないのは、中央集権化を進めようとする中央政府と分権化を望む地方勢力の対立です。またインド人とパキスタン人は個人的には仲がいいのに国家間紛争が独立後五〇年近くたっても一向におさまらないのは、正に両国が国家主権を強めようとするためなのです。従って今後、より平和な環境を望むのであるなら、国家主権の在り方が変わっていかねばならないことになります。その新しい方向とは、国内的には連邦制を強化し、国際的には地域統合を進める、すなわちこれ

まで国家が独占すると考えられてきた主権を分割あるいは共有する方向に進むことだと考えられます。国家は何も統合か分裂かの二つに一つしかないわけではないのです。